

小学四年

国語

解答と解説

<b>1</b>		<b>2</b>		<b>1</b>	
問一	エ	問一	ウ	問八	A
問二	ウ	問二	A	問九	イ
問三	イ	問三	エ	問十	自由
問四	ウ	問四	B	問十一	がある
問五	イ	問五	A	問十二	足
問六	エ	問六	C	問十三	C
問七	ア	問七	オ	問十四	ハ
問八	ウ	問八	イ	問十五	ル
問九	イ	問九	ウ	問十六	族
問十	エ	問十	ア	問十七	知
問十一	ウ	問十一	イ	問十八	る
問十二	イ	問十二	エ	問十九	ん
問十三	エ	問十三	ウ	問二十	な
問十四	ウ	問十四	ア	問二十一	ろ
問十五	イ	問十五	イ	問二十二	い
問十六	エ	問十六	ウ	問二十三	ア
問十七	ウ	問十七	エ	問二十四	イ
問十八	イ	問十八	ウ	問二十五	ウ
問十九	エ	問十九	ア	問二十六	ウ
問二十	ウ	問二十	イ	問二十七	ウ
問二十一	イ	問二十一	エ	問二十八	ウ
問二十二	エ	問二十二	ウ	問二十九	ウ
問二十三	ウ	問二十三	ア	問三十	ウ
問二十四	イ	問二十四	イ	問三十一	ウ
問二十五	エ	問二十五	ウ	問三十二	ウ
問二十六	ウ	問二十六	ア	問三十三	ウ
問二十七	イ	問二十七	イ	問三十四	ウ
問二十八	エ	問二十八	エ	問三十五	ウ
問二十九	ウ	問二十九	ウ	問三十六	ウ
問三十	イ	問三十	ア	問三十七	ア
問三十一	エ	問三十一	イ	問三十八	ア
問三十二	ウ	問三十二	ウ	問三十九	ウ
問三十三	イ	問三十三	エ	問四十	ウ
問三十四	エ	問三十四	イ	問四十一	イ
問三十五	ウ	問三十五	ウ		
問三十六	イ	問三十六	ア		
問三十七	エ	問三十七	イ		
問三十八	ウ	問三十八	ウ		
問三十九	イ	問三十九	ア		
問四十	エ	問四十	イ		
問四十一	ウ	問四十一	ウ		

<b>5</b>	<b>4</b>	<b>3</b>	
⑥ 園 芸 62	① 位 置 57	① イ 52	① 主語
⑦ 鏡 63	② 食 塩 58	② エ 53	イ 述語
⑧ 芽 64	③ 億 万 59	③ ア 54	エ 主語
⑨ 束 65	④ 各 駅 60	④ ウ 55	オ 述語
⑩ 焼 66	⑤ 血 管 61	⑤ オ 56	イ 主語
		⑥ 主語	ウ 述語
		⑦ 述語	エ 主語
		⑧ 述語	ア 述語
		⑨ 述語	オ 主語
		⑩ 述語	オ 述語

  

問十				
ところ。	わ ず か 半 年 の 間 に 感 じ と っ た	り が で き る 仕 事 だ と い う こ と を 、	木 型 が い ち ば ん 自 由 に 、 も の づ く	仕事をカッコ良いか悪いかで判断するだろうと思っていた若者が、

  

42  
43  
44  
45

(配点)  
 ①〔問八〕 6点、他各5点  
 ②〔問五〕 各2点、〔問十〕 8点、他各5点 } 計150点  
 ③④⑤ 各2点

【解説】

① まはら三桃の「思いはいのり、言葉はつばさ」（アリス館）から出題しました。登場人物たちの表情やしぐさに注目し、それぞれの気持ちを丁寧に読み取りましょう。

問一 B1 関係づけ 比較

① の直前で何が起こったのか読みとりましょう。今日習った字を思い出そうとしているチャオミンに、母さんがその字を教えてくださいとあります。問題が解決したわけですから、ここには「すつきり」が入ります。

問二 B1 具体化 比較

—— 線②の二文後で「母さんは文字の読み書きができないはずだ。そもそもあまり関心がないらしく、チャオミンが文字を教わりたと言ったときも、少し困ったような顔をした。なのに、わからない字をすぐに書いて教えてくれるなんて」とあることから、文字の読み書きができないはずの母さんが字を書いて教えてくれたことに対し、驚き、どういうことか、と思ったわけです。ですから、答えはウです。アは字を書けない母さんが字を教えたということに触れられていません。イ母さんが「イーレイおばあさんの顔をうかがって、字を書けないふりをしている」ということは、本文中では触れられていません。エ「やたら熱心に字を教えようとした」の部分が誤りです。

問三 B1 関係づけ 比較

③ 直前に「つえを頼りに」とあり、後に「足取りは頼

りなくなっている」とありますから、ここには「よたよた」が入ります。

問四 B1 具体化 比較

「つじつまが合わない」とは、ものごとの筋道が合わない、という意味です。—— 線④直後に「じゃあどうしてジュアヌはてん足をしてないんだろ。ジュアヌも漢族なのに」とあります。「ジュアヌも漢族なのに」「てん足をしない」ということがイーレイおばあさんの「漢族の女は野良仕事なんかする必要がないから、小さい足のままでいる」という発言と合わない、ということですよ。

問五 B1 具体化 比較

—— 線⑤「すつと背筋を伸ばした」という表現から、イーレイおばあさんの得意になって何か言おうとしている様子を読み取ります。ア「痛いところをつかれてあせって」の部分で誤りです。その後のセリフから、ウ「貧しいものへの思いやりの大切さを：説こう」としているとは読み取れません。エ「働きの漢族の女」とありますが、その前に「漢族の女は野良仕事なんかする必要がない」と言っており、働かなくていいことに誇りを持っているようです。

問六 B1 具体化 比較

—— 線⑥の直前に「私はジュアヌに失礼なことを言ったのかもしれない」とあることから、自分がジュアヌを傷つけたと気づき、「いたたまれない気持ち」になっていることがわかります。てん足は、イーレイおばあさんの言葉を借りれば、

野良仕事をしなくてもいい、豊かな漢族の女であることの象徴です。でも、働かなくてはならない、つまり貧しい漢族の女はてん足をしません。そのような現実がある中で「どうして：てん足をしていないの？」という質問は、「自分の家が貧しいからだ」と答えねばならないような質問なのです。そのような質問をしてジュアヌを傷つけたことを反省しているのでしょうか。ア・イ・ウはジュアヌに対する申し訳なさや自分がしてしまったことに対する後悔がありません。

問七

**A2** 知識 比較

「目を細める」とは、うれしそうな顔つきになる、という意味の慣用句です。

問八

**B2** 具体化 関係づけ

——線⑧の直前に「ドーホンばかり働かせないで、あなたももう少し働いたらどうかね」とあるように、イーレイおばあさんは、自分の息子ばかり働いている、母さんはなまけている、と言いたいようです。そして、てん足をしていることに誇りをもっているイーレイおばあさんが、てん足をしていない母さんの足を「立派な足」と言っているのは明らかに嫌味です。母さんはハル族出身なのだから働け、と言っているのです。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問九

**B2** 理由 比較

——線⑨の直後に「昔は、結婚すると女の人はそれくらい

のことあたりまえだったんだよ。だけど今はちがうから、心配しなくていいよ」とフオローしていることから考えましよう。一つは、イのようにチャオミンの祖母であるイーレイおばあさんの悪口になるようなことを言ったことに対する「しまった」でしょう。もう一つは、このセリフの中にもあるように、結婚すると、女の人は「話もろくにして」もらえないようなつらい目にあう、ということはまだ幼い娘に言ってしまったことに対する後悔です。チャオミンも母さんのセリフから、「体のどこかが痛いような顔」をしながら、三朝書の話をするウンエイを思い出しています。このことから、彼女たちにとって結婚は苦勞を伴うものだったということがわかります。ア「どうとう：氣づいて」、ウ「母さんが漢族のことを憎んでいる」、エ「イーレイおばあさんのことを心の優しい人だ」と思いこんで」の部分がそれぞれ本文の内容とあいません。

問十

**B1** 具体化 関係づけ

——線⑩の直後でチャオミンが「どうして？」と理由を聞くと、母さんが「だってハル族の女たちには、自由があるから」と答えています。ハル族の女の人たちが「かけ回れる」のも「歌も歌える」のも、それはひとえに自由だからです。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問十一

**B1** 関係づけ

「振りかえると」とあるので、その直前で何か後ろで気配があったとか、音がしたのだとわかります。その条件にあうのは、「イ」の「びしゃんとした声がきこえた」だとわかります。

② 小関智弘『ものづくりの生きる』（岩波書店）から出題しました。木型の仕事がどのようなものなのか、職人たちの話から読み取っていきましょう。

問一 B1 具体化 比較

この職人の言葉は、——線①の二文後に「木型屋は陽のあたらぬ仕事だと自嘲する気持」とあるように、陽のあたらぬ仕事をしている自分をあざけるような気持ちから出たものだと考えられます。ここでいう「陽のあたらぬ仕事」とはその後の文章中にも出てくるように、「脚光を浴びてこなかった」「地味な仕事」ということですから、答えはウです。

問二 B1 具体化 関係づけ

——線②の直後から、木型がどのようなものか、木型づくりがどういうものかという説明が、「機械用の鑄造技術が…」の段落の直前まで続きます。その部分から、あてはまる言葉を選びましょう。「木型は、鑄物のA」、「高度なB」、「などは、前後の言葉をヒントに選びましょう。そして、Cは結論の部分にあたるということに注目して、言葉を選ぶとよいでしょう。カ「日本でのみ」の部分が本文の内容にあいけません。

問三 B1 関係づけ 比較

文の並べ替えの問題では、つながりごとや、こそあどことばに注目するとスムーズにいくことが多いです。ア「その木の」とあるので、「木」について書かれているのは、イだけです。ウ、イ↓アという流れになることがわかります。ウに注目す

ると、「すると、砂の空洞になった部分は」とあります。アは「その木の内外を砂で固めたら、木型を抜きとる」とあるので、アの後にウが来ることがわかります。よって、答えは、イ↓ア↓ウです。

問四 B1 具体化 比較

——線④の「その縮み代」とは、金属が冷えた時に縮む分、ということとです。設計図通りに木型を作ってしまったと、冷えた時、設計図よりも小さいものができてしまうわけです。ですから、木型は、金属の縮み代を予測して、設計図より大きく作らねばなりません。ですから、答えはウです。ア・イは「冷えると縮むという木の特性」の部分が誤りです。

問五 A2 知識 比較

言葉の意味を問う問題です。⑤「生字引」とは、何でもよく知っている人のことです。⑨「こともなげに」は何事もなかつたかのように、いっこうに平気なようすで、という意味です。

問六 B1 関係づけ 比較

文を接続する言葉は、前後の文の関係をよく確認して入れましょう。⑥の前は「山本さんも、木型は工業製品の裏方だとか、縁の下だとか、捨石だといわれた」となっており、後で、山本さんのセリフがあり、「山本さんは」「その仕事の楽しさを語ることを忘れない人だった」とまとめられています。地味な仕事と言われてきたのに、仕事の楽しさを語ることを忘れない、ということですから、ここには逆接の「しかし」が入ります。

問七

**B1** 具体化 関係づけ

——線⑦の直後に、「木型を作るといのは、このようにいろいろな知識と技が必要で」とまとめられています。「このように」など、まとめであることを示す言葉には注目するくせをつけましょう。

※書き抜き箇所が正解でも、誤字脱字がある場合は不正解とします。

問八

**B1** 具体化 比較

「門前の小僧習わぬ経を読む」ということわざを知っていますか。寺の門前に住む子どもはいつもお経を聞いているため、特別に習わなくても、自然にお経を覚えてしまう、ということから、ふだんよく見たり聞いたりしていることは、知らず知らずのうちに覚えてしまう、ということとえます。ここでは「門前の小僧」だけなので、「いつもお経を聞いているが特別に習いはしていない寺の門前に住む子ども」ということでしよう。ですから、答えはウです。いろいろな知識や高度な技術が求められる仕事ですから、エ「特段の努力や苦勞もなく」の部分が誤りです。ア・イは「門前の小僧習わぬ…」のことわざの意味をおさえていないので、誤りです。

問九

**B1** 関係づけ 比較

⑩の直前に「若者たちは、木型がいちばん自由に、ものづくりできる仕事だ」ということを、わずか半年の間に感じとつてしまう」とあります。そして、「滝口さんの言葉」⑩のことを、見抜くのだ」とあるので、「木型がいちばん自由に、ものづくりできる仕事だ」と同じ意味になる、滝口さん

の言葉を探しましょう。ア・エは滝口さんの言葉ではありません。ウよりもイの方が木型づくりがどういう仕事か、説明したものだといえます。

問十

**B2** 推論 具体化 関係づけ

——線①の直前に「そう知って思わず」とあるので、筆者はここで知ったことにおどろき、感心したことがわかります。何を知ったかという点、直前の段落にある、(若者は)「木型がいちばん自由に、ものづくりできる仕事だ」ということを、わずか半年の間に感じとつてしまう」ということです。この若者の感性を「捨てたものじゃない」と感心しているのです。①「木型がいちばん自由に、ものづくりできる仕事だ」ということを②「わずか半年の間に感じとつてしまう」の二点が入っていることがポイントになってきます。

※ 設問の指示や字数・文字指定に従っていないものは不正解とします。ただし、誤字脱字が一つの場合は減点1点、二つある場合は減点2点、それ以上は不正解とします。また解答の説明に過不足がある場合は減点3点とします。

3

A2 知識 比較

主語と述語の問題です。まず述語から探し、それをしたのはだれか？ それはなにか？ というように考えると主語をとらえやすくなります。

① 述語は「行きました」です。「行った」のはだれかと考えると、「ぼく（わたし）」が主語になりますが、それが省略されている文だとわかります。ですから、これは主語のところに×と書きます。

② 述語は「おいしい」です。「おいしい」のは何かと考えると、「カレーは」だとわかります。

③ 述語は「賞状です」です。なにが賞状なのかと考えると、「これは」が主語だとわかります。

④ 述語は「しているよ」です。だれが花火をしているのか考えると、「子どもたちが」が主語だとわかります。

⑤ 倒置文（文が通常の語順ではない文）です。通常の語順に直すと、「ここから／見る／富士山は／本当に／美しいね」です。述語は「美しいね」です。この文の中で、なにが美しいのか、と考えると「富士山は」が主語になることがわかります。

⑥ 命令文です。述語は「しなさい」です。主語は「あなたが」なので、この文では省略されています。

4

A1 知識 比較

ことわざの問題です。どれも有名なことわざばかりなので、意味も一緒にしつかり覚えておきましょう。

① 良薬は口に苦し：他人から受ける忠告は聞きづらいが身のためになるといったとえ。

② 魚心あれば水心：一方が他方を気に入れば、他方も相手を入るようになる。

③ 立て板に水：立っている板に水を流すように、つかえないですらすら話すことのたとえ。

④ 火中の栗をひろう：自分の損を考えずに、他人のためにあぶないことをする。

⑤ 虫が知らせる：よくないことがおこりそうだと感じるのと。悪い予感。